

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.396



2004 NOV



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

山森理事長の「HAJ専従25年」を労う会

山森理事長は、主にカンチェンジュンガ縦走登山を実現させるために1979年11月1日にHAJ事務局に専従しました。本年11月1日に専従丸25年となります。

一般社会でも勤続25年是一个の節目として表彰されることが慣わしであります。本会もささやかな記念品を贈り、山森理事長の長年の専従を労う会を下記のとおり開催致します。

記

1. 日時：2004年11月2日（火）19時～21時
2. 場所：東京「かんぽヘルスプラザ東京」
JR池袋駅東口徒歩8分
3. 会費：1万円（ご都合により出席できない方でご芳志を戴ける方は事務局までお願い致します。金額は自由です。）
4. 申し込み：10月25日までにHAJ事務局まで、ハガキ、TEL、FAXでお願い致します。

HAJ華甲望年会

HAJでは、1999年からその年に「還暦」を迎えられた会員を迎えて「HAJ華甲望年会」を開催しております。

本年還暦を迎えられた会員は13名でありましたが、当日都合のつく7名の方をお迎えして下記のとおり「HAJ華甲望年会」を開催致しますので多数の皆様のご参加をお願い致します。

記

1. 日時：2004年12月11日（土）18時～20時
2. 場所：東京「かんぽヘルスプラザ東京」
3. 会費：8,000円
4. 申し込み：HAJ事務局へ、ハガキ、TEL、FAXでお願い致します。

2004年華甲祝賀の皆さん（誕生日順、敬称略）

- ①山森欣一（2月・東京）
- ②松館正義（4月・青森）
- ③督永忠子（4月・在パキスタン）
- ④大神田伊曾美（5月・東京）
- ⑤樋上嘉秀（6月・大阪）
- ⑥山田慶周（6月・長野）
- ⑦中村正勝（9月・長野）

表紙写真

2004年8月、カラコルムのカンピール・ディオール（7,168m）北面の偵察に入ったが、あいにくの悪天であきらめかけた頃、一瞬、雲がとれその雄姿を望むことができた。（文・写真：岩崎 洋）

ヒマラヤ No. 396

- | | |
|-----------------------------------|---------|
| 1. カンピール・ディオール北面偵察の記録 | 飛田 和夫 |
| 6. パスーBCを訪問する | 志小田 美弘 |
| 13. 速報 カラコロン山群主峰初登頂 | 東海大学山岳部 |
| 14. 速報 インド、中国国境の長大な湖と山 | 沖 允人 |
| 16. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス〉 | |
| 17. ナンガ・パルバット入山者 [1976-2003=28年間] | |
| 23. [連載] 日本ヒマラヤニスト名鑑 (11) | |
| 24. 事務局日誌 | |

カンピール・ディオール(Kampire Dior 7,168m) 北面偵察の記録 (2004年夏)

飛田 和夫

偵察前後

7月9日、平出和也隊長と谷口ケイ隊員の若い二人が、7,027mのゴールデン・ピーク（スパンティーク）に立った。C1のテントを撤収し、3名で北西稜を登攀しC2にテントを移動させるスタイルをとった。私は不調で6,200mのC2から二人を送り出した。

登山は終了し、私は一旦イスラマバードに戻り、トレッキングに出掛けたが、ゴールデン・ピーク登山当初から体調不良であった。トレッキングでは4,500mを越えた付近から胃が痛みだし食欲も無くなり、絶不調でイスラマバードに戻ったのは、8月2日だった。日・パトラベルには7月30日に日本から到着した岩崎洋H A J 常務理事が居た。彼は到着早々にカンピール・ディオール(7,123m)の偵察に行く予定だったらしいが、痛風のため出発出来ずにいた。

岩崎も私も、8月9日に到着する昨夏のH A J サマー・キャンプで、バスー東峰(7,295m)登頂後、クレバスに転落、救出された後に死亡した高橋敏雄隊員の夫人・久美子さんと、その時の酒井國光隊長（H A J 会長）、高橋の親友でH A J 評議員の天城徹彦、志小田美弘の両氏、更に高橋の遺体収容に同行したH A J 会員の寺沢玲子氏の7名がBCとバスーで合流し、BCまでの追悼トレッキングに参加することになっていた。

私は追悼トレッキングの前に2度トレッキングを予定していたが、最初のトレッキングから不調のため戻ってきた私を督永さんが心配し、二度目の行き先は通訳付きでイスラマバードのシーファー病院に変わった。

内科医の問診の結果、日本でも経験した事がないのに、何とパキスタンで生まれて初めて胃カメラを飲む事になってしまった。結果は胃潰瘍で、

潰瘍が4個写真に写し出されていた。それが出来たのが日本なのかパキスタンなのか定かではないが、いずれにせよ不調の原因は分かった。そして3週間分の薬を貰った。

偵察へ

痛風と胃潰瘍の二人組は、追悼トレックに合流するまでの間に、岩崎の目的としている、カンピール・ディオールの北面の偵察に行くことになった。この山は、1975年に広島山の会によって西面から初登頂されたが、その後は登頂されていない。

偵察期間は、8月7日から10日までの3泊4日、当初、岩崎が一人で一週間を予定していたので、食糧と装備はそれを使うことにした。

8月6日18時、ギルギットに戻る4輪駆動のトラック（運転席の後ろに二人用のシートがあり、後部は荷台）を掴まえ18時にイスラマバードを出発した。

7日9時過ぎギルギットを通過しスストに入る。ここで10日のジープを予約した。

1997年にオープンしたチャプルサン渓谷に入った。この方面には、2000年秋に私と寺沢、大住恵子、白沢真弓（全員H A J 会員）が入り、アフガニスタンとの国境であるイルシャド峠とチリンジ・



▲Yash kuk Yaz GLよりYash kuk方面を見る

▼Shi kardesh Nala



アンに立っている。(ヒマラヤ359号参照)

7日、チャプルサン河沿いに村々を通過、最奥の村Zuda Kuunでポーター1名を雇い、2000年には無かったゲート(帰路一人20Rsの支払い)を抜けて、ヤシ・クークに着いたのは夕方6時で、イスラマバードを出て丁度24時間であった。目指す方向にはヤシ・クーク・ヤズ氷河の舌端があり、そこから滔々と水が流れ出て、広い河原に幾重にも流れがある。西の方はジャラットで夕暮れの様相であった。最奥の村からトラックの荷台に乗って来た若者が、河原の道路側寄りにテントを張る我々を手伝ってくれるが、「明日のポーターは一人だ」と伝えた。彼は設営が終わると帰って行った。少々疲れていた病人二人は食事もそこそこにシュラフに入った。静かな夜だ。

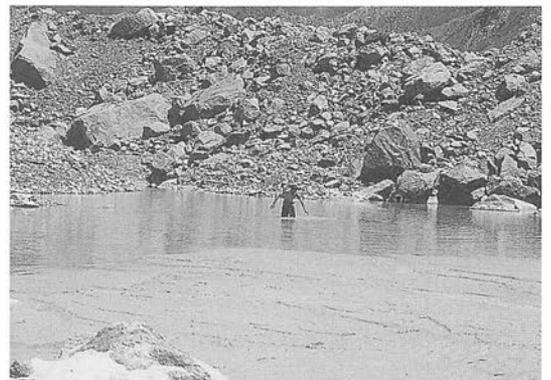
8日、静かな流れの音で目が覚めた。ラーメン1個と食べ残しのアルファ米を食べていると、ポーターが来てテントの撤収を手伝ってくれた。やはり二人いる。昨夜の若者に中年が一人。昨日あれだけ一人だ！と言っておいたのに。若者はガツカリした様子で帰ったのだが…。結局、荷物は一人分だから二人行っても賃金は一人分の約束で出発する。氷河舌端方面への車道を歩いて行くと、村の方からトラックが来た。荷台には子供から女、大人も含め沢山乗っている。その人たちの顔立ち

はパキスタン人とは違った。手を振り笑顔を振り撒いてくれた。ジャラット方面に仕事に行くのだろうか。

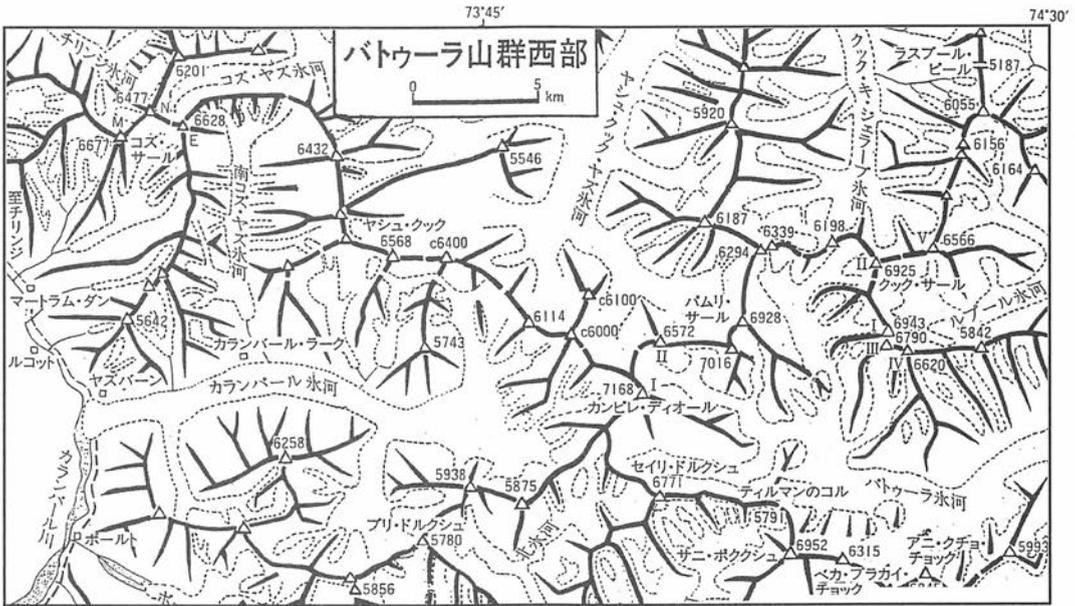
橋を渡ると左側から澄んだ水が流れ出ている。ポーターは「サーフパニ」なので水筒に入れた方が良いと言ってくれる。その少し先で道路から離れて舌端に上がり右にトラバースし、3本の小川を石伝いに渡り左岸に取り付く。左岸をトラバース気味に左上して行く。砂と石の中にトレールが続いている。高度を上げて行くと進行方向にはヤシ・クーク・ヤズ氷河が伸び、遠くに稜線が見え、ピークが白く輝いて見えた。左手氷河の対岸には5,544m、5,920m峰が連なっており、その左側の谷はクク・キ・ジェラブ氷河が入っていて、氷河は安定しているようだ。この氷河からルプガール・ピラを越え、ルプガール河を下降してススト方面へ、また、河の途中からバトゥラ氷河を経てパサーに至るルートがあるとの事だが、ポーターもパサーに行けると話していた。

下降途中からクク・サール(6,935m)を見ることが出来そうだ。この山は私が1976年、初めての高峰登山で許可を取得したが、計画を断念せざるを得なかったので踏査してみたい所だ。さらに下降して行けば、バトゥラ山群が右岸に連なる。そしてカラコルム・ハイウェイ(KKH)に出る。1995年にKKHからバトゥラ氷河に少し足を踏み入れユンからパサー側のピークに達し、バトゥラ氷河、バトゥラ山群、カンピール・ディオール、クク・サール方面を見た事がある。カラコルム・ブルーの下、真っ白いピークが連なっていた。

今、後方には氷河下端と広い河原が望める。痛



▲アブレーションバレーの池で水浴するポーター

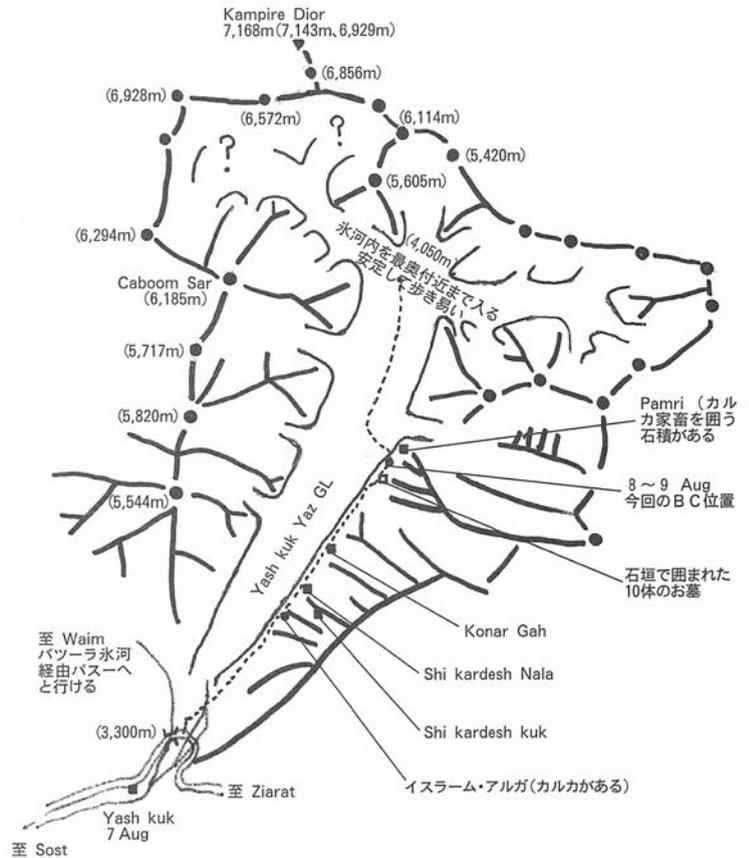


▲ヒマラヤ名峰事典 (平凡社刊) より

Yash kuk Yaz GL付近概念図

風も胃潰瘍も忘れて二人はその風景に見入った。左岸をトラバースすると、左側にはサイド・モレーンが発達していた。小岩のゴロゴロしたアブレーション・バレーを登って行くが、ルートはしっかりしていて歩き易い。赤い谷(仮称)を過ぎ、しばらくするとイスラーム・アルガのカルカが現れた。天井には木が渡され屋根もしっかりしていて、中に入ると涼しい。その先、サイド・モレーンの押し上げられた跡を登ると右に折れて下る。下降する手前で前方を見ると地図上のPamriと思われるアブレーション・バレーが望めるはずだが、実際はそこからさらに少し先だった。

わずかに高度を下げた地点は、三角洲の台地状になっていて小川が流れている。沢の上部、稜線下はカール状になっていて緑がある。その付近からだろうか冷たい水が流れて来ている。ポーターたちは早速お茶を沸かし、チャパティカロティを食べ始める。彼等から差し入れられたチャパティはほんのりと緑色だった。二人は相変わらずラー



▼Pamriのより下流を見る



メンだ。この場所はキャンプ地に適しているがカルカは無い。地図上ではシ・カルデシュ・ククとなっているが、それは上部の稜線付近で、カルカのあったイスラーム・アルから道があるとのことだ。ここはシ・カルデシュ・ナラと言うらしい。

少し登り尾根を左から廻り込んで行くとガレ場となる。右足甲痛風の岩崎は、右側の足場が不安定になるとアブナイ！ので慎重に行動。先行するポーターはゆっくりと行動する我々を心配そうに間隔が開くと適当な場所で待っている。

その後はほぼ同じ大きさの岩屑が稜線から敷き詰められた様な斜面、稜線付近の小沢が次第に広がり押し出された斜面、サイド・モレーンが発達している場所等を、じわりじわりと登り高度を上げていく。氷河を挟んだ対岸のピークの数も増し、正面稜線上のピークも段々近くなって来た。

押し出しの氷河寄りに立つ大きなケルンを過ぎると、アブレーション・バレーに水が流れている。わずかに下降して流れに達した。かなりの水量がモレーンが切れた所から氷河に吸い込まれていた。ポーターたちは疲れてきている様子だが先行して行き二人はその後に続く。草原帯から湿地帯になる所で、ここがPamri（パミレとかパムロ、パメルと言っていた。）と言う。地図上ではこの先だと言うと年上の方が「そうだ」と言うが、今日はここに泊って明日の朝Pamriに行こうとも言う。しかし、我々の希望を入れてか歩き出した。

突然池が現れた。こんな所にこの様な池が？と思ってしまう。さらにブッシュの中の小沢を2～3本渡ると、前方にカルカの様な石積みが見えポーターがカルカに到着した。やっと着いたかとホッ

として近づくと、ポーター二人がじっと覗き込んでそこを離れ先に進もうとしていた。私も石積みの所に近づき中を見てビックリした。それは墓だった。長方形の墓で中には10体の遺骸があった。あまりにも突然の事で言葉を失った。後から来た岩崎も中を見るがほんのわずかで目を離していた。何故この様な場所にこんな墓と思われるものが。ポーターたちに聞いてもはっきりした回答は得られなかった。

その少し先の流れの中間台地状にテントを張る事にした(3,880m)。この付近がPamriとの事だが地図上ではもう少し先のようだ。夕方になってからポーター二人はテントに来て、これから帰るという。雨が降り出しそうだ。二人共シュラフはあるがシートは無いという。帰るからお金をくれといい、約束した賃金は安いという。どうも突然の墓の出現に動揺しているらしい。結局二人は思い直したようで我々のテントの前に石を積みショールで屋根掛けをした。

サイド・モレーンに上がるが雲が多くなり山はスッキリと見えない。夜、一面の星空となるが夜半雷と共に雨が降り出す。フライを掛けるが我々だけ快適に寝る訳にもいかず、ハロー、ハローと声を掛けてくるポーターを中に入れた。足を伸ばすこともできないままに朝を迎えた。

氷河舌端発7時35分～シ・カルデシュ・ナラ着10時、同所発11時～キャンプ・サイト着14時半。

9日、雨は止んでいるがどんよりと雲が立込めている。ポーターはぐっすり寝た様子でテントから出て行ったが、我々は睡眠不足の中途半端な不快感が残っている。昨夜同様に痛風の岩崎は食



▲PamriのサイドモレーンよりYashi kuk Yaz上部

欲がなく、胃潰瘍の私は食べれなく二人で1個のラーメンを食べ終わると「食ったな！」と変な会話を有様だ。情けない。

1. Pamriの場所の確認。
2. カンピール・ディオールの確認と登頂ルートを探る。
3. 同時に宮森マップの？部分の確認。

天気が悪いうえに偵察は今日一日しかない。何とか3つを確認すべくサイド・モレーンに上がる。テント地からモレーンをつめて行くと、前方右下のアブレーション・バレーの中に草原帯とカルカらしい石積みがあった。地図上のPamri地点と一致した。

左下に広がるヤシュ・クク・ヤズ氷河は、サイド・モレーン付近は起伏が激しそうだが、中間部分は安定していて、氷河の最奥で稜線から連なる尾根状部分まで続いている。氷河に入って最奥部まで行ってみる事にした。Pamriの確認はその帰りにすることにして氷河に下降する。

氷河の中央付近はモレーンカバーされ黒々して歩き易い。右岸、左岸を地図と照合し、写真を撮りながら上部へと進んだ。カンピール・ディオールやその登攀ルート、付近の稜線、正面の6,400mとその右に連なるヤシクク(6,568m)も確認したかったが、その方面には雲がありなかなか消えない。我々が氷河の最奥部に達しても状況は変わらなかった。

時間切れのため残念ながら同ルートを下降して行くと、カンピール・ディオール方向と思われる付近の雲が去り始め、雪をどっさりと付けた頂が姿を現した。山頂！かなと雲の去るのをジット待っていると、更にその奥に高い頂があった。あれだ！、あれこそ今回の偵察の目的であるカンピール・ディオールに間違いない。痛風と胃潰瘍の男二人が興奮した。見えたぞ！。

登頂ルートを探す。北面は頂上から雪と氷に覆われた高度差2,500mの完全な壁。右手に雪稜があるが入り組んだ稜線であいにく下部が見えない。北面からトライするためには、再び偵察が必要だと痛風男は呟いた。正面右の6,400m？峰の北面は稜線に雪稜が突き上げていてルートになりそうだ。

帰路Pamriに寄るとポーターはカルカでシュラ

フに入っていた。彼等が以前にここまで来たことがあるか不明だが、カルカがあることは知っていたのだろう。ここにあるカルカは、家畜を飼う石積みとしっかりした屋根がかかっていた。すぐ近くに水の流れがあり、草花も咲きテント・サイトには絶好だ。

最後の最後になって目的のカンピール・ディオールの姿を見ることが出来た。来た甲斐があった。とりあえず機関誌「ヒマラヤ」の表紙写真が撮れたと、岩崎がホットしている様子が伝わってきた。テントに戻り何はさておき祝杯！といたいところだが、今の二人はアルコールを飲んではいけな……とか。

10日 悪天の周期なのだろうか、今朝も雲は多めだ。この後の追悼トレックは好天周期に入りそう。

昨日同様二人でラーメン一個で食事を済ませ、登ってきたルートを下降した。氷河舌端に戻り昼食の準備をしているとジープが到着した。ポーターからは約束した金額以上の賃金を要求されたが、ちょっと色をつけて支払いすると彼等も嬉しそうに受け取った。

スストで日・パトラベルに下山の連絡を行い、夕方にはパサーに着いた。

キャンプサイト7時～氷河舌端11時25分

おわりに

短期間だったが二人共薬を飲みながらの偵察山行は終了した。カンピール・ディオールは確認出来たが、北面からの登頂ルートを探るまではいかなかった。今後、北面の偵察を行うには北壁に続く氷河に入らなければならないだろう。この氷河からは北壁、北西稜(仮称)や、頂上からクク・サル方向の稜線などを探れるだろう。

それにしても、この山の登山はH A Jのサマー・キャンプの舞台としてよりは、E X Pとしてトライするに相応しいだろう、と病人二人は話し合ったのであった。

11日のパサーは朝からシトシトと雨が降っていた。これは悪天周期最後の足掻きと思い、明日からの好天を期待した。夕方には追悼トレックのメンバーと合流した。

パサーBCを訪問する

(2004. 8. 9 ~ 23)

HAJパサーBC訪問団 志小田 美弘

2004年の夏は昨年とは打って変わっての全国的な酷暑となった。本稿は、2003年HAJサマーキャンプに於いてパサー峰登頂を果たしながらも、帰路においてクレバスに転落し亡くなった故高橋敏雄君を追悼する為にパサーBCを訪れた訪問団の記録である。

(団長) 酒井國光(65)、団員: 高橋久美子(43)(故高橋敏雄隊員夫人)、天城敏彦(57)、志小田美弘(45)、(以下、現地参加者) 飛田和夫(58)、寺沢玲子(52)、岩崎 洋(44)。

< 8月9日 成田国際空港からイスラマバードへ >

前日に天城氏宅にて食料等の買い出しを済ませていた天城、志小田、高橋の3名は成田国際空港出国ロビーにて、酒井団長と見送りに来ていただいた酒井夫人と合流する。PIAカウンターにて手続きの後、出国ゲートに。しかしながら、パキスタンからの折り返し便である搭乗予定のPK852便の成田への到着時刻が遅れ、14:00フライト予定が1時間遅れの15:00過ぎとなった。

快晴の中、PK852便は遅れを取り戻すべく一路北京へ…のはずが、北京空港が混雑しているとの理由で、天津空港へいったん着陸すると機内放送。(定期便なのだが…)天津空港では暑い機内でひたすら待たされる。18:25北京へ向けて再び発ち、結局北京空港をイスラマバードに向けて飛び立ったのは21:00過ぎとなった。

< 8月10日 イスラマバードからチラス >

イスラマバードにPK852便が到着したのは、3時間遅れで日付の変わった午前0時30分であった。現地参加の寺沢玲子さん、日・パトラベルの大住恵子(HAJ評議員)さんの出迎えを受ける。我々の飛行機が到着する寸前まで、激しい雷雨であったそうである。日・パトラベル到着は午前1時過ぎとなった。ビール数本で再会を喜び、早朝の出発に備えてすぐにベッドに入る。

5:30に起床、朝食はとらずに6:20ハイエースに荷物を積み込み、日本からの4名に現地参加の寺沢、コックのエイブラヒム(通称ペチャ)とドライバー(ストロングドライバーであった)を加えた7名で出発。途中の茶店で、日・パトラベルで持たせていただいたおにぎりの朝食をいただく。

(エジプト米のおにぎりとのことだが、十分な粘りがありたいへんおいしかった。)

われわれを乗せたハイエースはカラコルム・ハイウェイ(KKH)へ。やがてインダス川沿いの道となる。時間の経過と共にインダス川はその流れを荒々しく変えていく。氷河を溶かし込んだ灰色の流れに時折白い波が逆巻く。V字谷の引っかき傷のようなKKHをハイエースはギンギラギンに飾り立てたパキスタントラックを追い抜きながら進む。路肩がむき出しの狭いKKHは高いところで、高度およそ数百mはあろうか。徐々に山肌は緑から茶褐色へと変わり、乾燥の度合いが増していくのがよくわかる。

KKHを進むと山側の断崖に激突して大破した大型バスが1台。しばらく行くと右曲がりのカーブを曲がりきれなかったか、橋の欄干(ロープですが…)を飛び越えて10数m下のインダスへの支流に転落したバスが1台。いずれも居眠り運転で死傷者も相当数出たらしい。2日前の事故だそうだが、橋の上にはまだ見物人がいた。14:00ベシャ



▲フンザ川に転落したバス

ムにて、チキンカライとオクラカレー、ナンの昼食。

19:30薄暗くなったところで、灼熱の町チラスに到着した。宿のパノラマホテルはきれいな施設だが、チラスは熱風が吹き、評判通り熱い。途中、ナンガ・バルバットが見えた。

長いフライト、短い睡眠、KKHの長距離ドライブ…。長く感じた1日であった。

< 8月11日 チラスからパスー村(2,400m) >

7:00出発。ハイエースは一路パスー村を目指す。10:00ジャンクション・ポイント着。ここは、ヒマラヤ山脈の西端、カラコルム山脈の南端、そしてヒンズークシュ山脈の東端となる場所である。太古の時代、インド亜大陸がユーラシア大陸に激突して生まれた大きな地球のしわの真ん中にあることを目視で確認できる貴重なポイントである。その深いしわの間をインダスは流れる。

12:15ラカボシ峰(7,788m)の下にある、ラカボシビューポイントというKKH沿いのレストランで昼食。残念ながら、ラカボシの上部は雲の中であって見えない。氷河から流れ落ちる水を集めた谷筋から吹き降ろす風は冷たかった。

ハイエースはインダス川からフンザ川沿いを進み、間もなくフンザに入る。緑が豊かで道路沿いには杏がたわわに実っている。乾燥の中を進んできて、この緑をみるとこの地が桃源郷と称されるのがよく理解できる。途中、正面にウルタル峰(7,388m)とフンザピーク(6,270m)が見える場所で車を降り、樹上の杏を食したが、甘みが大変強く美味い。日干しレンガの家々の屋上には、収穫した杏の実を干す籠がオレンジ色にいくつも広がっていた。

パスー村手前で、ローカルポーターを手配するために先行していたエイブラヒム（ベチャとは別人のエイブラヒム）とばったり出会う。16:30パスー村着。投宿先のパスーインにて、カンピレ・ディオール峰(7,143)北面の偵察から昨日戻っていた飛田和夫氏、岩崎洋氏と合流する。これで、現地合流の3名を含めて今回の訪問団の全員が揃うことになった。

夕食の前に、ポーター預けの25kgずつの荷造りを済ませた。

▼KKHからパスー(右手奥)とウルタル(左)を望む



< 8月12日 パスー村からパスーガル(3,210m) >

5時過ぎに目が覚め、外に出てみると小雨がぱらつき、対岸の5,000mの稜線には雪が付いていたが、やがて小雨は止み快晴となった。8:00ポーターの荷物を載せたトラックは出発し、われわれは8:30にハイエースに乗り込み、KKHを10分ほど戻った地点、シャルマールから車道と別れ、キャラバンをスタートさせた。

非常に暑い中、礫砂漠のなだらかな斜面を登っていくと昨年にはなかったというトラクター道路が現れ、やがてその終点で荷分け中のポーター達と出会う。ポーター組合のリーダーと思しき男が英語で昨年のパスー隊の事故について話し、われわれ訪問団に対する歓迎の言葉を述べる。その後、酒井団長が答礼を述べる。メモリアルの学校建設の話等を持ちかけられたが、短期の滞在であることを話して断った。

パスーガルへの登りは、パスー氷河右岸沿いの気持ちのいい草付きを進み、12:15パスーガル着。パスーガルは、ワイルドローズが咲き、ヒバが点在する中を小川が流れるすばらしい場所である。昼食の後、思い思いに休息する。初日には、寝不足からかやや不調であった高橋久美子さんも山に入ってからむしろ体調が戻ったようであり、まずは一安心する。

18:00に夕食。村で買った鶏を唐揚げし、飾り包丁で盛り付けられたサラダ…。日・パの教育の成果であろうが、コックのベチャの腕前はたいしたものである。

< 8月13日 パスーガルからラズダール(3,660m) >

5:00に目が覚める。テントを出るとやや寒い

が、今日も快晴である。7:00チャパティとお粥の朝食。今日はパス-氷河を横断し、対岸のラズダールまでの短い行程ではある。8:20に出発する。パス-氷河右岸の草付きに沿って登る。30分ほど登るとパス-峰の前峰が見える。右岸から氷河に入り、氷河上のトラバースはセラックやクレバスを避けながら歩き易いところを選んで進む。時折、大きく割れている箇所もある。

11:30今日の幕場、ラズダールに到着。パス-氷河の左岸の崖下に草付きが広がり、カルカが点在する気持ちのいい場所である。水はないので氷河から得る。幕営後は荷物整理など、各自思い思いに過ごす。

< 8月14日 ラズダールからパトゥングス(4,100m)、そして諏訪隊BC(3,900m) >

5:00に目が覚める。国内でも早起きのせいで、同じ時間に目が覚める。用足しがてら氷河まで行き、冷たい水で洗面する。今日も快晴、快晴。雲ひとつない。

8:10出発。パトゥングスへはヒバの古木が点在する急斜面の九十九折れの急登となる。

パトゥングス近くまで上がるとぐっと視界が開ける。背後には、2000年HAJ隊で高橋も登ったスパンティーク峰の北面がきれいな三角形で遠くにその姿を現し、間近にはウルタルII峰からシスパーレ峰(7,611m)までの北面の峻麗な姿とヒマラヤ巒が目前に迫る。今回の訪問団の唯一の目的は、故高橋敏雄君の追悼であるが、パス-氷河上のC1上部、彼の遭難の地も遠望できる。しばし、周囲の景観に見とれながら、様々な思いが各自の胸に交錯する。



▲左手稜線上にパス-東峰が頭を出している

▼パトゥングス付近(標高約4,000m)を登る



丈の短い草原の中に可憐な花が咲くなだらかな斜面を稜線に沿ってゆるやかにトラバース気味に進み、やがてパス-氷河に向けて崖下に一気に下るとそこがサイドモレーンの谷アブレーションバレーの中の諏訪隊BCである。12:30着。夕食は天城氏が日本から持参の具材を使っての手巻き寿司。酢飯が食欲を促進する。

夜半過ぎ、小用にテントを出ると満天の星空にくっきりとシスパーレとパス-前峰のシルエットが浮かぶ。そして流れ星。長い時間、外で天を見ていた。

< 8月15日 諏訪隊BCから2003年HAJ隊BC(4,100m) 往復：追悼式 >

いつもの通り5:00に目が覚める。若干頭痛がする。日本で富士山に1泊してきているが、この程度の頭痛はしょうがない。

朝食後、7:45飛田さん、岩崎さんがパス-氷河への入り口周辺のルート確認と整備の為に先発する。8:30出発。氷河左岸のアブレーションバレーの中を進む。時折、気持ちのよい緑地が現れる。アブレーションバレーが徐々に狭くなり、やがて歩きづらいサイドモレーンに移る。足場の悪い、片側が傾斜したグズグズのガレ場歩きとなる。足場が狭いので昨年の収容時には苦労したと思う。改めて、収容にあたっていただいた岩崎さん、寺沢さん、そしてたくさんの方々のHPの方々に対する感謝の念を抱いた。

やがて、サイドモレーンのガレ場からパス-氷河に入る。2003年HAJパス-隊は、C1への距離を詰めるために氷河上の4,100m地点にBCを建設している。10:30HAJ隊BCに到着した。岩崎さん

によれば、氷河上のBCは1年の歳月の中で10mほど下に流されているとのことであった。

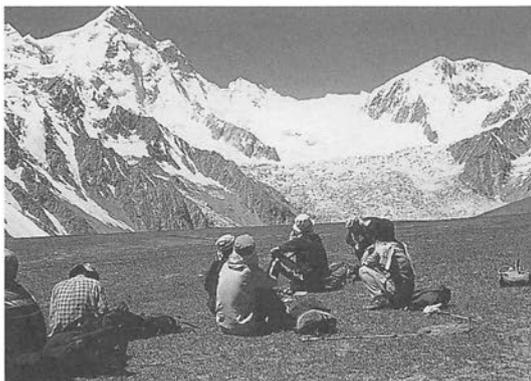
さっそく氷河を削り、適当な石を置いて祭壇を設ける。日本から持参の清酒「八海山」を供え、天城さんが線香代わりの煙草を、久美子さんがおにぎりを祭壇に供えた後、故高橋敏雄君の冥福を祈り、酒井団長以下全員で黙祷を捧げた。

昨年のHAJ隊々長である酒井団長の追悼の言葉の後、友人として志小田が追悼の言葉と共に今回の訪問団に関していただいた多くの方々の御支援について御礼と感謝の言葉を述べ、全員で献杯をして追悼式を終了した。深い悲しみを新たに噛みしめた時間ではあったが、昨年夏に彼が存在した氷河上での時間は、各自の胸中にそれぞれの想いを残した時間でもあったと思う。

13:00過ぎに、全員が諏訪隊BCに戻る。18:00夕食と共に、追悼の集いを持つ。水分をたくさん摂ったため、夜中に3回小用にでる。満天の星だった。<8月16日 諏訪隊BC(3,900m)からパトゥングス(4,100m)>

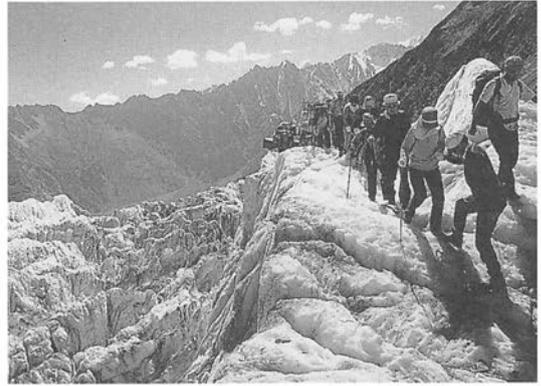
ビザの延長のためイスラマバードに戻らなければならない飛田さんと、仕事のために19日の飛行機で日本に戻る岩崎さんは、今日中にフンザまで戻るために一足早く7:30出発。

本隊は8:00過ぎにゴミ拾いをしながら三々五々に出発。ここからは往路を戻ることになる。急なガレ場を登りきった後は、パトゥングスへと続くならかな稜線沿いをトラバース気味にのんびりと歩く。途中で、ポーターに追いつかれ、彼らと一言二言会話する。彼らによれば、天候は1週間ほどのサイクルで晴天期と時雨(降雪)期を繰り返しているとのこと、丁度晴天期に山に入って我々はたいへんラッキーだとのことである。確かにここまで、見事な晴天に恵まれてきている。改めて山の神様に感謝する。



▲パサー氷河の登山ルートが明瞭だ

▼氷河の横断、昨年よりは氷河の状態は良好



返しているとのこと、丁度晴天期に山に入って我々はたいへんラッキーだとのことである。確かにここまで、見事な晴天に恵まれてきている。改めて山の神様に感謝する。

ウルタルからシスパーレへ続く雪稜に見とれ、パサー氷河そしてパサー前峰を振り返りながら歩いた。10:00過ぎにカルカ下のパトゥングスに到着後、ポーターたちに場所を指示して天幕を張る。その後、全員が揃ったのは12:00近くになっていた。ペチャ作のカレーうどんの昼食の後、久美子さんと寺沢さんは石拾いと押し花用のお花摘み、酒井団長と天城さんはロケーションの素晴らしいこの地での写真撮影と思い思いに過ごした。志小田はテント内で記録整理と原稿書き。

夜8:00過ぎに、テントを出て空を見上げると、数え切れないほどのおびただしい数の星。天の川の白い帯はパサー氷河の上に横たわり、シスパーレのシルエットが天に延びる。そして、小さくほのかに水色を残した右手パツラ氷河の上空には北斗七星が輝く。しばし、見とれた。

深夜、キッチンテント辺りからの異様な物音で目が覚める。はじめはペチャが荷物の整理でも始めたかと思っていたが、物音は段々無神経な大きさに変わり、何者かの足音とともに、ついにガラガラガッちゃんという道具類が崩れ落ちるかのような決定的な音が…。急いでシュラフから這い出し、テントから出てみると、どこからかやってきた牛の訪問だった。ペチャが起きだし、投石しながら追い払う。塩でも舐めにきたのだろうか。

<8月17日 パトゥングス(4,100m)からパサーガル(3,210m)>

▼昨年のBC跡にて、慰霊式準備



明け方前から風がやや強く、風に砂が舞って埃っぽい。空は今までとは明らかに異なり、パサー氷河上部には雲が垂れ込め、シスパーレからウルタルへの稜線ももはや雲の中である。遠く北のほうに小さな青空があるのみである。天候が変わり始めている。

8:00曇り空の中、バトゥングスの景色を惜しみながら出発。今日は、ラズダールに下り、氷河を渡ってパサーガルまでの行程である。小1時間ほど九十九折の急坂を下ってラズダール着。この頃から雨が降り始めた。

パサー氷河左岸のラズダールから右岸のパサーガルへ、氷河を渡渉するわけであるがこの氷河の渡渉に何と3時間を要した。張り切ってポーターの先頭に立った（立ってしまった）アシスタントコックの若者ムザファール・カハーンがセラックの中をダッチロールし、後続は迷路の中をさまようように右に左に歩いた。寒さの中、降雨で更に滑りやすくなっている氷河の中をピッケルを振りながら上り下りさせられた。

往路でもそうであったが、この氷河の中での二人のエイブラヒムの久美子さんへの献身的なサポート振りにはたいへん感心させられ、仕事を超えた思いやりや温かさを感じた。彼らは二人とも昨年のパサー隊や収容隊へ参加しており、当然高橋君のことも、その人間性のことも知っている。そこから生まれてくる温かさなのだと考えながら、彼らの行動を見ていた。

パサーガルに12:30過ぎに到着。雨は一時小康状態だったが、また強く降り始める。上部はすっかり雲に隠れている。夕方から雨はあがり、夜は

再び星が見えた。

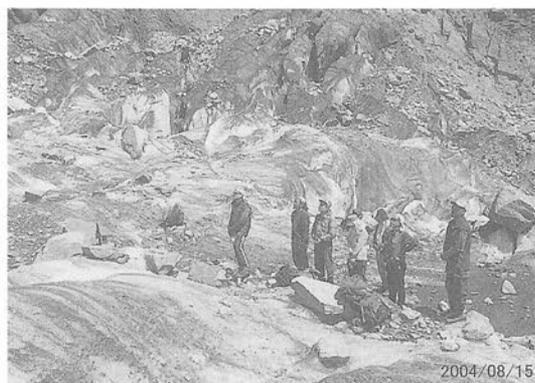
< 8月18日 パサーガルからフンザ >

今日で山での生活も一区切り、下界の生活へと戻る。テントを撤収し、曇り空の中7:30出発。パサー氷河から水を引いている水路沿いに下る。所々、石が敷き詰められている快適な山道である。水路を築き、命の水を守り続けてきた村人達が長い間、整備し続けてきた道なのだろう。やがて1時間ほどでトラクターの終点に着く。ポーター達の荷物はここで彼らの背中から、トラクターへと積み替えられた。その後1時間ほど歩いて、KKHに出る。約束どおりハイエースが待機していた。

11:40フンザエンバシーホテル到着。テラスからラカボシ峰(7,788m)とディラン峰(7,257)が見える清潔で快適なホテルだった。久しぶりにシャワーを浴び、洗濯をした。夕食には、フンザパニ(赤は自家製ぶどう酒・白は桑の実の蒸留酒で強い)を味わうことができた。ここはパキスタン回教国であるが、フンザはもともと昔からぶどう酒を造ってきた王国であり、アルコールを嗜む人も少なからずいるとのこと。赤ぶどう酒はいかにも手作りの味でなかなかいけた。白は中国の白酒の風味で今ひとつと思ったが、3本目の白は非常においしかった。手作りゆえ、瓶ごとに味が微妙に異なるのだ。

< 8月19日 フンザ滞在で休息 >

7:30朝食後、ウルタル氷河を背に建てられているフンザ王国時代のフンザ古城に皆で登る。乾燥の地にあって突然現れる緑の豊かなこの地はやはり桃源郷の名にふさわしい土地である。ウルタル氷河から引かれた水路に沿って、白い樹肌のポ



▲H A J 隊BCで慰霊式を行う

プラの木々が林立し、林檎や杏、桑の実がたわわに実る。白い土壁に木枠の窓の家並みが、独特の景観を作り出している。豊かな土地なのだろう。フンザ古城見学の帰り、寺沢さんの案内でワジド・ウラ・ベイグ氏（投宿先フンザエンバシーホテルのオーナーでもある）の邸宅を訪問する。ベイグ氏は昨年にも来日しており、HAJの華甲忘年会にも出席している。彼は庭造り（フンザ古城の下、まさに空中庭園）の真最中であったが、快く我々を自宅に招いてくれた。

彼は、若者たちが都会の文化だけに憧れていることを憂い、フンザの伝統的な文化やこの景観を守ることの必要性を熱く語り、下水道などのインフラ整備をしながら生活を改善していく努力をしたいと語っていた。また、教育の重要性にもついても熱心に話していた。その後、彼の案内で伝統工芸品を製作するために若い女性が作業をする工房や彼の事務所では伝統的な住居を基本とした都市計画の模型などを見せていただいた。

ノーブレス・オブリージェという言葉がある。簡単にいうと、力を持つ者やそれなりの地位にある者は、相応の義務を果たす責任を負っているということである。ベイグ氏はフンザ王国時代から続く由緒ある家柄であり、この地にとっては相当な富裕層である。彼の話に、貴族の責任を感じたひと時であった。

その後、土地の食堂でチキンカレーとナンで昼食をすませ、みやげ物などを購入しながら、三々五々宿に帰った。

KKHで雨が降っているとの情報があり、道路のアクシデントに備えて今日のうちにいくらかでも前進すべきかとの議論もあったが、地元のガイドの情報では問題ないとのことで予定通り明日の出発に落ち着く。

< 8月20日 フンザからベシャム >

5:30荷物積み込み、6:00出発。長距離移動になることと途中の道路事情を考えての早い出発となる。出発から1時間程で、昨日の雨で山側からKKHに水分をたっぷり含んだ泥が扇状地のように流れ込み、通行不能となった場所に遭遇した。時間の経過と共に小さな扇状地を挟んで向こう側とこちら側に車列は長く伸びていく。一台のライ

▼目的を果たした後の憩い



トバンがパキスタン軍への連絡の為に引き返していった。（その後、兵士が1名来たが、問題は小さいと判断したのか、彼は最後まで傍観者でしかなかった。）

どこの国にもやはりチャレンジャーはいるものである。向こう側の車列の数台後ろにいたギングラギンのトラックが痺れを切らしたかのように、扇状地に突っ込んだ、…があえなく泥につかまりスタック。後ろのトラックにチェーンで引っ張ってもらい、苦労の末に脱出した。その後、こちら側の後ろから日産サーフのお兄さんが無謀にも扇状地に挑戦したが、冷静に状況をコメントしつつ、写真撮影していた酒井団長の「あれじゃ、しょうがねえよ。」の予想通り、善戦することもなくスタック。

この手のトラブルには慣れているのであろう人々は、荷物を持って徒歩でどろどろの扇状地を渡り、こちらのワゴン車からあちらの三菱デリカに乗り換え、それぞれの車は来た道を引き返した。合理的である。



▲バスー氷河横断を終えた高橋久美子さんとコック



結局、スコップ2本による人力作業で、ミニ扇状地の泥を谷側遥か下のインダス川へ落とす作業を続けることになる。およそ1時間40分後、後続にいたトラクターを一台通して轍を造り、そこをトラックが通過することに成功し、観衆の拍手の中KKHは谷側のみ復旧した。気毒な日産サーフはその後もしばらくは山側の泥の中につかまっていたままだったと思われる。

8:40往路にも立ち寄ったラカボシビューポイントでチャパティとチャイの朝食。KKHの宿場町ベシャムのインダス川沿いに建つホテル到着は19:00。

<8月21日 ベシャムからイスラマバード>

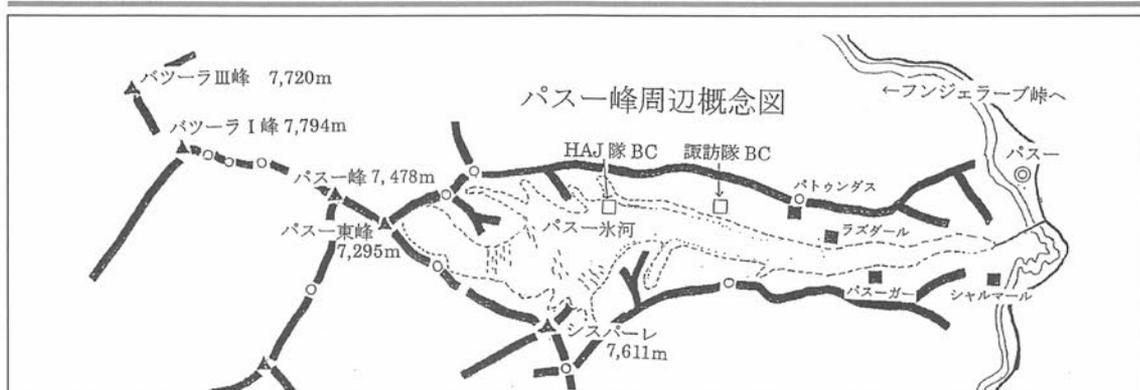
9:00ホテル出発。途中で、タキシラの仏教遺跡を収蔵している博物館を見学し、日・パトラベル着は17:00。往路では会えなかった日・パトラベルの督永さん、一足はやく戻っていた飛田さんの出迎えを受け、夕食は大住さんも加わって久々の賑わいとなる。

テーブルに故高橋敏雄君の写真を掲載したHAJの機関紙を飾り、彼の分のグラスも用意し、改めて献杯をした後、彼の思い出を語りながら杯を傾けた。この夜は酒井団長以下、ただひたすら飲み込んだ。

訪問団は、翌22日午後10時過ぎ（パキスタン時間）の便でイスラマバードを經ち、翌23日正午過ぎ（日本時間）に成田に到着した。成田にはHAJ山森理事長と一足先に帰国していた岩崎さん、それと酒井さんの奥様、天城さんの奥様にお迎えをいただいた。

思えば、今次の訪問団の派遣に際して、HAJ関係者はもとより、多くの方々の御支援をいただきました。故高橋敏雄君の追悼ということで派遣された訪問団ではありますが、訪問団に参加した者のみならず、彼への思いを共有していただいている方々は沢山いると思っています。

改めて、今次の訪問についてこの紙面をもって報告申し上げるとともに、御支援に対して心からの感謝を申し上げる次第であります。ありがとうございました。



カラコンロン山群主峰(6,355m)初登頂

東海大学山岳部

2004年夏、東海大学山岳部学生による登山隊が、中国新疆ウイグル自治区崑崙山脈西端の未踏峰、カラコンロン山群主峰6,355m峰に初登頂した。

カラコンロン山群はカシュガルの南百数十キロ、主峰は北緯38度11分18秒、西経75度11分29秒に位置し、麓からその主峰は望見できず、その存在はあまり知られていなかった。

登山隊は小松由佳(4年)隊長以下7名、それに出力葉義次監督、平出和也コーチ、笹尾玄医師が同行。7月30日に日本を出発。ウルムチ滞在中、新疆大学を親善訪問。8月2日、麓の村タクルマンに到着。翌3日、ベースキャンプ予定地偵察と荷上げを開始した。8月4日、標高4,500mのココシル氷河舌端にベースキャンプを設営。8月7日、氷河上標高4,900mに第1キャンプを設営、これまで誰も見ることの出来なかった三角錐の鋭峰、6,355mの主峰が姿を現した。

この第1キャンプから本格的な登山を開始、氷河上のモレーンから主峰へ続くプラトーを目指し高度を上げ、8月12日、標高5,600mの雪原に第2キャンプを設営した。

主峰へのルートは困難を極め、急峻なクーロアー

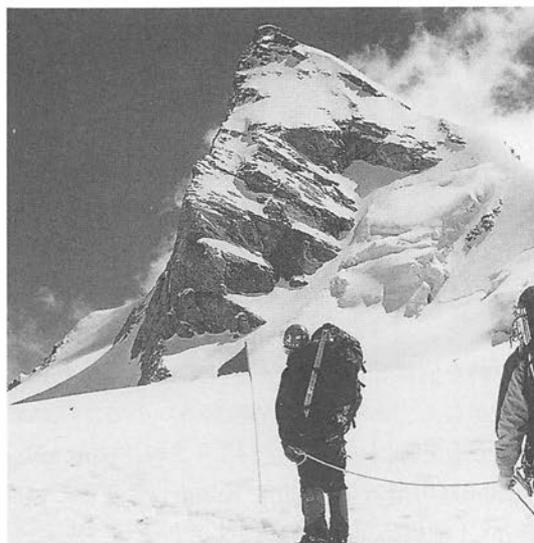
ルの氷壁、稜線に出るまで冰雪壁の苦しい登攀に終始、8月14日、フィックスロープ600mを稜線まで固定した。

翌15日、第1次アタックの3名、小松由佳隊長(4年)、青本達哉(2年)、それに平出和也コーチが午前6時30分登攀を開始、頂稜まで合わせて800mのフィックスロープを固定、午後1時10分初登頂に成功した。

8月16日、第2次アタックの3名、小島拓(3年)、猿橋秀隆(2年)、それに出力葉義次監督が午前7時登攀を開始、天候悪化が懸念されるなか午後2時4分登頂に成功、第1次、第2次、合わせて6名の登頂者を出すことができた。

単一大学の学生登山隊がビマラヤ未踏峰へ挑戦するのは極めて稀であり、創部以来初の女子主将がリーダーとして登山隊長を務め、常にトップでルートを拓いたことは評価される。

なお、カラコンロン山群主峰は無名峰のため、東海大学と新疆大学の交流を記念し、「波」を意味するウイグル語「ドルタン(dolkun)」、「山」を意味する「ムスターグ(mstag)」を組み合わせ、「ドルクンムスターグ(山の波)」と命名した。



インド、中国国境の長大な湖と山

中京山岳会 沖 允人

インドのジャム・カシミール州の北辺地帯に、東西の長さ約140km、幅約1kmのパンゴン湖がある。この塩湖の、ほぼ、中央部にインド・中国の未確定国境がある。故にパンゴン湖とその周辺は両国にとっては重要な国境地帯であり、これまで外国人の立ち入りは厳禁されていた。しかし、昨年夏、この湖の東端にあるチュスルの軍事基地でインド・中国両国の国境警備隊の幹部による史上初会談があり、雪解けムードがただよってきた。このニュースをキャッチした私たちは、パンゴン湖の西側に連なる未探検地域の多いパンゴン山脈の北端に近いハロン峰(Harong, 6,210m)に登山の申請をした。通常ならインドとの合同登山しか認められない山域であるが、いろいろと折衝した結果、幸運にも日本人だけの登山隊として正式許可が出発の半月前にやっと届いた。もちろん日本人としても初めてであるが外国人が入域したことのない地域でもある。総勢は、日本人7名(沖允人(69)、増田秀穂(61)、梶田明(70)、武藤政之(63)、加藤功(66)、沖道子(66)、増田歳子(62)の平均年齢65歳を越すシルバー・メンバー)、インド政府連絡官(リエゾン・オフィサー、以下リエゾンと略記)1名、シェルパ(高所ポーター)3名、インド人キャンプスタッフ5名、ジープ2台、大型トラック1台である。

8月5日に日本を出発し、7日にニュー・デリーから空路でラダックの主都レー(Leh, 標高約3,700m)へ入り、9日までレーに滞在し、10日にレーからジープでタンツェ(Tangtse, c. 4,000m)を経由して、ハロン(Harong)村に行き、目的のハロン峰を偵察した。しかし、上部に適当なキャンプ地がなく、また落石の危険が多いので、ハロン峰から南東約3kmにあるスパミック峰(Spangmik, 6,250m)(現地名 Tangyak Kangri)に変更し、BとC1地点(5,400m)も選定した。

ところが、その日の午後にインド軍隊のジープがBCにきて、16日から砲撃の実弾演習を実施するのでスパミック峰を含む地域が危険なので移動して欲しいという。特にC1地点は誤爆の恐れがあり、BC地点の西側を流れているロ・ヨンマ川(Lo Yongma)の対岸なら安全だという。そうならば登山目標も変更し、BCも移動しなければならない。BCを川の西側のチブラ(Chhibra, 4,300m)村近くに移動することを決定した。

リエゾンと相談し、登山目標をラダック山脈の6,000m峰に変更し、チブラ村から西に見える上部に雪のある三角形の山に変更した。この山群にはピークが3つあり、一番高いのがルケルー峰・P3(Rukheru, 6,050m)であり、これらはいずれも未踏峰である。

8月18日、山の上部には降雪があったが、C1(4,800m)に泊まっていた増田副隊長はペマ・ツェリンとサンゲ・プンの2名のシェルパとともに頂上へのルート偵察と工作にC1を出発した。ルートは困難が少なく、登高を続け、幸いに、13時25分にルケルー峰・P1(Rukheru, c. 6,025m)に初登頂した。続いて、20日にルケルー峰の南にある5,810m峰にも沖、増田、加藤、シェルパ3名がアタックし、増田副隊長とシェルパのサンゲルが初登頂した。

その間、沖隊長と武藤登攀隊長が協議した結果、ルケルー峰に全員登頂するには、BCから頂上まで標高差が約1,700mあるので、途中にC1に加えてもう一つC2のキャンプを建設しなければならないが、高所キャンプ用装備はスパミックの旧C1に残置したままになっていて、手元の装備では不足であるし、ルケルー峰の山姿が若干魅力に欠ける。また、ルケルー峰周辺の別の山に登るには、この山域がパンゴン山脈ではなく、ラダック山脈にあることからこれ以上登山を続けるのは、リエゾンの了承を得ることが困難である。このこ

▼ハロン(6,210m)があるパンゴン湖周辺



とは、リエゾンが先日レーに行き、レーの地方事務所(DC)などに確認したとき、大変厳しいことをいわれたという。すなわち、8月13日の砲撃訓練の通達のあった時点で登山を中止させるべきであって、現在、行っている登山は違法の疑いがあるということである。

8月22日は日曜日でインド軍の砲撃訓練は休みである。この1日を利用してスパンミックのC1の装備などを下ろすことにした。残置している装備の量も多くないのでシェルパ3名に荷下ろしを依頼した。彼等は午前4時15分にBCを出発し、12時頃にスパンミック峰に初登頂し、15時30分に

中京山岳会インドヒマラヤ報告会

上記登山隊の報告会が下記のとおり開催される。

記

日時：10月24日(日)10時～報告会

12時～懇親会(14時まで)

場所：ルブラ王山 名古屋市千種区覚王山通8-18

(地下鉄東山線池下下車2番出口徒歩3分)

電話 052-762-3151

会費：お一人様五千円

申し込み先：角野真弓 電話&FAX 052-936-5194

E-mail: cyukyo-mayumi@mve.biglobe.ne.jp

〆切：10月12日(10月7日～11日は不在)

※留守勝ちのため、お電話の場合は留守電に、お名前と出欠をゆっくりと吹き込んで下さい。メールをいただいた場合は、必ず返信しますので、返信ない場合はメールが届いていないと思われるから電話等で再度ご連絡下さい。

BCの全装備を持って下山した。BCからの標高差、約2,000mを1日で往復する超人的な活動をした訳である。

インド軍の砲撃訓練は9月2日まで日曜日を除く毎日、25～100発の実弾射撃が続けられ、砲弾の炸裂する大音響が山々に響き、着弾地点には黒煙が上がっていた。

以上のような状況を勘案して、外国人が初めて訪れたパンゴン山脈とその周辺のサトゥー(Satto)村などとの交流や探査を成果に加えることとし、今回の登山は終了することを決定した。

8月25日パンゴン湖(Pangong Tso Lake, 4,200m)の西側湖畔まで行き、エメラルドブルーの美しい湖の一部と対岸の雪をかむった中国に続く禁断の山々を眺めた。結局、約3週間は標高4,000m以上の酸素が大変薄く、草や樹木のほとんどない岩と雪と砂漠のような高地で生活するという貴重な経験をしたことになる。

その後、レーへ帰り、陸路を3日かけてヒマチャール州のマナリの町に出た。ここで隊を2分してヒマチャール山域、とガルワール山域を探査し、9月6日にデリーに帰着し、9月10日の朝、成田空港に帰国した。

(注)この周辺については「ヒマラヤ391号」を参照下さい。

ピーター・ショーニング逝く

1958年にガッシャーブルムI峰(8,068m)に初登頂したアメリカのアルピニスト、ピーター・ショーニング氏が亡くなった。享年77歳。

氏は52年にアラスカ州とカナダのユーコン準州の間にあるオーガスタ(4,289m)に初登頂した後、1953年にはチャールズ・ハウストンの率いたK2登山隊に参加し7,680mまで到達した。またその登山では滑落した仲間5人を一人でくい止めた。

58年にはクリンチ隊長の下、登攀隊長としてガッシャーブルムI峰登山隊を組織し、7月5日、カウフマンと初登頂に成功した。

66年には再びクリンチと南極に向かい、最高峰のヴィンソン・マシーフ(4,897m)に12月18日初登頂した。

地域ニュース

《中国》

パチュムハム(6,529m)初登頂

日本山岳会関西支部の西チベット学術登山隊(大西保隊長ら7人)が9月3日、ヒマラヤ山脈の未踏峰パチュムハム(中国・チベット自治区、6,529m)の初登頂に成功した。同隊は8月下旬に登頂を始め同31日に5,880m地点で待機。3日午前、天候の条件などが整ったため一気に登り切った。

また、同隊は18日にもギャンゾンカン(6,080m)にも初登頂した。ギャンゾンカンはパチュムハムと同じく中国・ネパール国境付近にある未踏峰で、隊員3人が東壁ルートから登頂に成功した。

また、隊員が全地球測位システム(GPS)で計測すると、ギャンゾンカンの標高は6,123mあったという。

コーラの缶からテントまで大清掃

中国はこのほど、世界最高峰のエベレスト(チョモランマ、8,848m)に残された「登山ごみ」の大清掃を行った。中国は2008年北京五輪でエベレストを越える聖火リレーを計画しており、国家の威信がかかる一大イベントに向けた環境整備の意味もありそうだ。

15日付の中国紙・北京日報によると、作業は中国の探検家協会とチベット自治区政府が主催し、海拔5,100-6,500mの地域で、3日間にわたり行われた。全国から100人以上の志願者が参加し、登山者が捨てた酒瓶や空き缶などの一般ごみや、廃棄された酸素ボンベ、テント、登山ロープなど計8トンを回収した。ごみはヤクがふもとまで運び、同自治区の区都ラサまで運搬された。

北京五輪組織委員会はずでに、200人規模のエベレスト超え五輪聖火リレー隊員の選抜作業に入っている。中国は10月から、エベレストの環境保全をテーマにした展示会を全国で行う予定で、国家イベントへの関心を高めたい意向だ。

トピックス

第16回 全国海外登山集会のお知らせ

労山主催の海外集会が下記のとおり開催される。

1. 日時：11月13日～14日(13日午後1時開始)
2. 場所：静岡県御殿場高原「時の栖」
TEL 0550-87-3700
3. 費用：全日参加 12,000円、日帰り 1,000円
4. 内容：11/13 渡辺玉枝さん講演、11/14 K2登山隊報告他、最新海外登山情報
5. 問い合わせ、申し込み先
日本勤労者山岳連盟全国連盟海外委員会
TEL 03-3260-6331 FAX 3235-4324

第2回 北日本海外登山研究会のお知らせ

1. 日時：2004年11月6日(土)正午～7日(日)正午
2. 場所：宮城県川崎町青根温泉「坊源」
3. 内容：冬期ROUTE、チョー・オユー、シジャパンマ登山隊報告、岩崎洋講師を迎えての講演など
4. 照会・申し込み先：〒028-3163 岩手県稗貫郡石鳥谷町八幡23-13 小野寺光義
電話 (0198)45-5275

故・野沢井歩一周忌開催される

9月5日(日)午前11時から茨城県水戸市「セレモニア富士水戸駅南館」において、H A J 前専務理事・野沢井歩氏の一周忌が執り行われた。当日は、山岳関係者、親族、友人など約100名が北は青森、南は山口から参列し故人の法要を行った。

東京集会のお知らせ

- | | |
|----|---|
| 日時 | 10月25日(月)午後7時～ |
| 内容 | 最新のネパール事情 |
| 場所 | H A J ルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、J R 大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分) |

ナンガ・パルバット入山者 [1976－2003＝28年間]

(注) 派遣母体名の後ろの()内は、登山隊員＋報道等であるが、学術隊員、医師等は登山隊員とした。氏名の前の×は、その登山で死亡した者。

[1] 1976年夏

福岡大学(9)

隊長：加藤秀木(55)／隊員：植松満男(39)、樋口速水(29)、三苫達久(27)、石村義男(25)、阿部盛俊(25)、首藤秀樹(25)、荒谷渡(21)、菊池守(20)

[ナンガ・パルバット(8,126m)登山史上20番目の登山許可を得て、西面第2登を目指して7月23日、ディアミール谷4,000m地点にBC設営。4,250mにデポを設け30日5,000mにC1、8月10日C2(6,000m)、25日、キンスホーファー氷田にC3(6,600m)を建設した。29日、3名が7,100m地点に到達したが、結局ここが最高到達点となった。]

[2] 1981年秋

山学同志会(4)

隊長：大宮求(32)／隊員：木本哲(25)、田沼雅彦(24)、道脇幸博(24)

[西面から秋の登頂を目指して10月10日、ディアマ氷河3,800m地点にBC設営した。19日C1(4,520m)、23日C2(5,020m)、11月8日C3(5,350m)、15日C4(5,420m)を建設し、16日、6,025m地点に到達したが11月に入ると日照時間が短く寒気も強く、凍傷にかかる隊員も出て登頂を断念した。]

[3] 1983年春

登歩溪流会(10)

隊長：国井治(38)／隊員：玉田仁(30)、×志村仁(32)、粕川要治(26)、大垣伸一(40)、和久津清(24)、清水修(24)、藤塚弘(35)、荒井保明(30)住吉仙也(57)／ナジール・サビル(29)

[南西稜からの登頂を目指して4月23日ルパール谷3,650mにBC設営。4月下旬でBC付近には1.5mの残雪があった。5月6日C1(5,100m)、16日C2(6,000m)、27日南西稜上6,600m地点

にC3建設。6月5日C4予定地の7,400m地点までルート仕事を終えた。17日C3からC4へ向かった国井、新井、清水、ナジール、志村、和久津が7,000m付近で福岡隊の二人と共に雪崩に遭い、固定ロープに届いていなかった志村が流され行方不明となった。このため登山は中止された。]

[4] 1983年春～夏

福岡登高会(17)

隊長：大石義豊(42)／隊員：新貝勲(52)、副島勝人(39)、山崎直也(39)、北崎映次(36)、山内耕二(34)、上野義信(36)、林邦博(35)、高山直己(23)、辻政信(30)、古賀光義(29)、古賀久男(44)、山下朋美(45)、×山田信義(44)、×飯田敏(46)、×高森雄一郎(30)、西田哲朗(29)

[南西稜からの登頂を目指して5月19日ルパール谷の3,600mにBC設営。24日C1(5,050m)、31日C2(6,000m)、6月14日C3(6,500m)建設。17日に7,000m付近で登歩溪流会と一緒に山内、高山が雪崩に遭い負傷した。18日にもその収容作業中の副島、北崎も雪崩に遭い、北崎が指を骨折。7月1日C4(7,300m)建設。しかし、以後悪天候が続き15日までの期限に登頂できない事が分かったため下山中、12日午前6時頃、前夜半からの降雪のためC1が雪崩に襲われ、4名がキャンプ共巻き込まれ、山田、飯田、高森が行方不明となった。飯田は後日発見された。]

[5] 1983年夏

富山県山岳連盟(14)

隊長：木戸繁良(48)／隊員：高塚武由(41)、佐伯尚幸(44)、尾島健誠(35)、谷口守(35)、酒井秀光(35)、伊藤隆夫(25)、多賀谷治(28)、島田俊之(28)、川尻知幸(26)、中西紀夫(25)、佐伯成司(25)、佐伯賢輔(24)、田辺隆一(31)

[西面からの登頂を目指して6月5日、4,360mにBC設営。19日C1(5,210m)、7月3日C2(6,260m)、18日C3(6,850m)、23日7,300m地

点にC4を建設。25日、谷口、中西、佐伯成が7,800mに達したが深雪のため断念。27日、再び谷口、中西が7,800mで断念。29日、7,850mにC5を建設し、30日、谷口、中西が8,070m地点でビバークし翌日、日本人初登頂に成功した。]

[6] 1983年夏

川崎市教員(5)

隊長：坂原忠清(38)／隊員：松井公治(33)、鈴木博夫(26)、釣部恵子(30)

[北面からの登頂を目指してラキオト氷河に入山。7月28日、3,960mにBC設営。翌日C1(4,500m)、8月3日C2(5,040m)、10日、北東稜下の6,100m地点にC4建設。14日、坂原と松井がチョンラ南峰(6,448m)に登頂。同峰には2日後に釣部も単独で登頂した。同日、松井がヒドン・クレバスに転落、失神し酸素吸入で蘇生した。18日、松井、鈴木が7,050mに達したが翌日の嵐のため登山を断念した。]

[7] 1984年春～夏

京都岳人クラブ(10)

隊長：須藤建志(34)／隊員：乃村昌広(29)、堀江良明(27)、和田城志(34)、高塚泰司(28)、小西浩文(22)、大沼拓実(31)、駒宮博男(30)、峰本枢(29)、友田幸一(30)

[西面からアルパイン・スタイル登頂を目指して5月下旬にBC設営。高所順応活動を行い、7月1日から3パーティに分かれて登頂を目指したが、200mを残して断念した。]

[8] 1984年春～夏

U-TANクラブ(4)

隊長：長谷川恒男(36)／隊員：竹鼻伸広(31)、中里好宏(23)、加藤由美子(34)

[南西稜からの登頂を目指して、5月8日BC設営。21日C1(5,000m)、6月3日ABC(6,000m)、10日C3(6,600m)建設し24日C4(7,400m)に入った隊長、竹鼻、中里が翌日、7,450mのコルを越えてディアミール側に移ったがそこが最高到達点となった。]

[9] 1984年夏

日本ヒマラヤ協会(4)

隊長：×角田不二(31)／隊員：×今給黎宣幸(28)、×肥田繁男(26)、×小暮孝(26)

[ルパール中央側稜からの登頂を目指して5月28日BC設営・31日C1(4,000m)、6月9日5,800mにC2、25日6,700mにC3を建設。BCで休養後7月2日C3を目指したが悪天でBCへ下山。6日C3に入ったが、18時のBCとの交信を最後に全員行方不明となった。]

[10] 1984年秋

U-TANクラブ(5)

隊長：長谷川恒男(36)／隊員：百瀬智宏(26)、西山俊男(45)、新保美美子(40)、西川栄名明(28)

[隊長が単独で中央側稜からの登頂を目指して入山。BCを3,650mに設営。10月3日から9日まで荷上げを行い、13日アタック、5,760m、5,900m、6,550m、6,700mと進んだが天候悪化でBCへ下山。20日再びアタックに出発したが、結局、メルクルリンネの7,650mに到達したのが最高到達点となった。]

[11] 1984年秋～冬

山学同志会(9)

隊長：大宮求(35)／隊員：岡野孝司(34)、久松宏人(32)、×瓶田裕己(29)、関根孝二(29)、野崎勲(23)／撮影：平井信造(35)、大蔵喜福(33)／報道：滝田よしひろ(27)

[西面からの冬期登頂を目指して10月6日ディアミール氷河3,970mにBC設営。高所順応のためガナロ・ピーク(6,600m)に向かう。15日隊長、17日久松、瓶田が西峰(6,290m)に登頂したが主峰は6,318mで断念した。20日C2(4,570m)、22日C3(5,130m)、23日C4(5,530m)、29日、5,870m地点にC5建設。11月9日C6(6,270m)、北峰Ⅱ峰の北西稜に取り付き、27日C7(6,280m)し、29日に6,450mまで到達した。12月3日～アタックしたがC7止まりとなり、下降中の8日、瓶田が6,050m付近で滑落死亡した。]

[12] 1985年夏

札幌山岳会(8)

隊長：清水一行(52)／隊員：横山英雄(42)、向井豊(34)、長谷川耕司(31)、越後谷彰(30)、大井良夫(28)、貝塚珠樹(24)

[北面からの登頂を目指して6月10日、3,960mにBC設営。14日C1(4,420m)、16日C2(5,340

m)、20日C3(5,970m)、7月3日C4(6,500m)、9日C5を6,955mに建設。11日、横山、向井、越後谷、大井がアタックしたが、午後2時過ぎ、7,420m地点で強風と寒気のため登頂を断念した。C5に戻り、横山、向井、越後谷とC4から登ってきた長谷川の4名が、ライコット・ピーク(7,070m)に登頂した。]

[13] 1985年夏

福岡大学

隊長：植松満男(48)／隊員：石橋康治(37)、村岡辰夫(32)、渡俊二(35)、原秀士郎(32)、菊池守(29)、島道彦(27)、篠原寛明(26)、花田博志(24)、早川功宏(22)、三田孝(19)、田中充(19)、高須俊昭(43)、中村譲治(26)

[1976年の雪辱戦。西面からの登頂を目指して5月21日4,100mにBC設営。26日C1(5,000m)、6月1日C2(6,000m)、7日C3(6,600m)建設後悪天到来。7月2日C4(7,400m)、4日C5(7,600m)、8日菊池、花田が登頂に成功した。]

[14] 1985年秋

高山研究所(4)

隊長：遠藤晴行(28)／隊員：長尾妙子(29)、吉崎岳(22)／報道：加藤幹敏(35)

[西面からの登頂を目指して入山。連絡官の問題で入山が遅れたが9月11日にBC設営。登攀隊員は遠藤、長尾の2名。C1へのルート工作と、5,700m付近のロープ固定を終え、20日アルパイン・スタイルで登攀開始。5,200m、6,050m、6,500m、6,800mと泊まったが天候悪化のため登頂を断念した。]

[15] 1986年夏

サンナビキ同人(7)

隊長：和田城志(36)／隊員：岡本正人(36)、乃村昌広(30)高塚泰司(29)、大村達也(27)、英直樹(24)、大杉浩文(22)

[ルパール中央側稜からの登頂を目指して入山。5月24日3,560mにBC設営。28日C1(4,750m)、6月10日C2(5,300m)、17日C3(5,900m)、29日C4(6,700m)、7月4日C5(7,350m)を頂上岩壁の下に建設。6日にアタックしたが7,600mまで。30日、31日のアタックも7,750mで断念。メルクルリンネはものすごい落石で突破で

きなかった。]

[16] 1987年夏

川崎市教員(7)

隊長：坂原忠清(42)／隊員：松井公治(36)、岡林良一(35)、山口均(29)、田村大作(24)、大谷均(32)、中島修(25)、

[西面からの登頂を目指して入山。7月28日BC設営。29日C1(5,000m)、8月5日C2(6,180m)、7日C3(6,800m)、9日C4(7,200m)11日7,300mの仮キャンプから3名がアタックしたが断念。15日にも7,400mから3名がアタックしたが断念。16日松井、岡林も断念。19日再び松井、岡林がアタックし登頂に成功した。]

[17] 1987年夏

アウトドアーズ(5)

隊長：玉田仁(35)／隊員：早坂敬二郎(41)、河野兵市(29)小笠原修一(32)、矢野順子(30)

[ルパール中央側稜からの登頂を目指して入山。7月31日BC設営。8月8日C1(4,700m)、20日C2を雪洞に変え23日C3も雪洞とした。9月3日6,650m付近で冰雪崩に襲われ河野、早坂はアストールの病院で手当てを受けた。13日玉田、河野でアタックしたが河野が頭痛のため玉田一人でアタックしたが、19日にメルクル氷田に抜けたものの登頂を断念した。]

[18] 1988年夏

高山研究所(3)

隊長：遠藤晴行(31)／隊員：遠藤由加(22)、宮城喜代美(23)

[西面からアルパイン・スタイル登頂を目指して入山。6月6日4,200mのBCに入る。7日～12日は休養と順応。13～18日はC1とC2間に700mのロープ固定。23日アタックしたが、7,500mで断念。7月4日のアタックはC2まで。9日C2入りし、10日C4、11日は7,800mで断念。12日C4からスイスのヴィンソンと3名でアタックし、夫妻での登頂に成功した。]

[19] 1989年夏

東京農業大学(15)

隊長：早坂敬二郎(42)／隊員：桜井仁(44)、大平展義(43)、小笠原岩雄(36)、小林新二(32)、×馬場哲也(29)、中嶋真也(29)、北村勝行(29)、

秋場雅樹(27)、福沢幸子(25)、吉野昌江(25)、
佐藤正倫(25)、谷川太郎(22)、清水大祐(20)
／撮影：水越武(51)

[ラキオト・ピーク南東稜からの登頂を目指して
ルパール谷に入山。6月18日BC設営。23日C1
(4,500m)、7月1日C2(5,100m)、12日C3(5,600
m)建設。16日C3の荷上げ中に、馬場が落雷
を受けガス・カートリッジに引火、18日、5,250m
で死亡した。29日から登山再開、8月6日C5
建設のルート工作中に雪崩を誘発。目標をラ
キオト・ピークに絞ったが、7日吉野がC1～
C2間で滑落骨折したため登山を断念した。]

[20] 1990年夏

川崎教員(9)

隊長：坂原忠清(45)／隊員：松井公治(39)、×
中島修(28)、戸高雅史(28)、尾谷寛一(25)、細
田一郎(39)栗田陽介(26)、藤井秀人(35)、成田
泰樹(24)

[南西稜からの登頂を目指して7月25日3,600m
にBC設営。27日C1(5,100m)、30日C2(6,200
m)、8月8日C3(7,050m)、12日C4をディア
ミール側7,500mに建設した。16日、戸高と中
島がアタックし7,600mでビバーク、翌日は強風
のため一旦撤退。18日、戸高が15時前に登頂
した。中島を待ったが来ないので下降すると、
滑落跡があり中島が死亡していた。]

[21] 1990年夏

同人バイネニアソブ(4)

隊長：長尾妙子(34)／隊員：玉田仁(37)、佐藤
正倫(26)、三好恭子(29)

[西面からの登頂を目指して6月12日BC設営。
21日C1、29日C2(6,200m)、30日6,88mにC3。
7月6日、長尾、玉田、佐藤でアタックした。
8日C4(7,300m)を作り、翌日、7,900mに達し
たが断念。玉田が足に凍傷を負い下山。20日長
尾、佐藤がスペインのポルティエヤとアタック、
23日にC4入り、24日、長尾は足指に凍傷を負い
引き返したが佐藤は16時50分登頂に成功した。]

[22] 1991年夏

サンナビキ同人(8)

隊長：和田城志(41)／隊員：岡本正人(42)、笠
井芳郎(42)、乃村昌広(35)、高塚泰司(34)、梶

山正(30)、尾形達也(26)、角田忠(26)

[ルパール南東ビラーの第2登を目指して入山。
6月10日BC(3,650m)設営。C1(4,500m)、24
日、C2(5,100m)、7月18日C3(6,020m)、
8月1日C4(6,690m)、6日C5(7,230m)、
7日、和田、梶山、尾形がアタックしたが9
ピッチで断念。14日、梶山と角田がアタックし
14ピッチ登って稜線まで3ピッチの7,950mに到
達したが断念した。]

[23] 1993年夏

日本教員(8)

隊長：坂原忠清(48)／隊員：細田一郎(42)、千
葉真嗣(27)、小久保壮(23)、大宮秀樹(20)、北
村俊之(30)、望月泰彦(33)、栗田陽介(26)

[西面からの登頂を目指して7月26日BC設営。
28日C1(5,200m)、8月2日、6,200mにC2、
8日C3(6,600m)、14日C4(7,200m)建設し、
16日、千葉、望月がアタック、千葉は台座手
前で断念したが、望月は16時登頂に成功した。]

[24] 1995年夏

千葉工業大学(10)

隊長：坂井広志(38)／隊員：藤井正善(48)、寺
本正史(47)、矢部幸男(29)、平田潔(28)、石井
渉(29)、田村恵一(28)、秋山武士(27)、上坂隆
幹(25)、岩本崇(22)

[北面新ルートからの登頂を目指して6月8日
BC(4,500m)設営。ラキオト氷河を經由して
5,100mに11日C1、18日仮C2(5,700m)、25日
C2(5,900m)、7月4日C3(6,700m)、21日C4
を7,350m地点に建設、22日、坂井、矢部、秋
山でアタックしたが寒気と睡眠不足で断念。23
日、再び頂上を目指し、夕刻5時過ぎに初登
攀に成功した。帰路ビバークとなった。]

[25] 1995年夏

日本教員(6)

隊長：坂原忠清(50)／隊員：高橋敏雄(36)

[西面からの登頂を目指して入山したが、登頂を
断念した。]

[26] 1996年夏

墨田山の会(3)

隊長：倉橋秀都(36)／隊員：横山肇(32)、上野
幸人(42)

[南西稜からの登頂を目指し、6月13日3,550mにBC設営、18日C1(5,100m)、28日6,000mにC2、7月19日C3(6,500m)建設し、21日7,050mに到達したが断念した。]

[27] 1997年夏

関西登高会(7)

隊長：梶浦正刺(62)／隊員：山口忠夫(55)、賀集信(48)、山本秀夫(47)、佐々木良三(41)、大谷篤(25)、黒田誠(24)

[西面からの登頂を目指して6月14日BC(4,200m)設営。16日C1、18日C2、7月4日C3、7日C4、17日C5建設、18日、賀集、山本、大谷が登頂に成功した。]

[28] 1997年夏

山岳同人'84

隊長：澤田実(28)／隊員：榊原義夫(43)、小野岳(36)、越後谷正喜(29)、平岡竜石(28)

[西面からの登頂を目指し、6月11日BC(4,400m)設営。13日C1(5,000m)、14日C2(6,200m)、20日C3(6,600m)、7月6日C4(7,400m)建設し、7日、澤田が登頂。19日には平岡、小野、榊原も登頂した。]

[29] 1997年夏

江北山の会(1)

隊長：細田一郎(46)

[南西稜からの登頂を目指してH A Pと入山したがC2地点で断念した。]

[30] 1998年夏

太陽と風の会(4)

隊長：×大宮秀樹(26)／隊員：小口順史(29)、小口亮子(25)、棚橋靖(35)

[西面からの登頂を目指して7月11日BC設営。棚橋は単独で行動。16日、C1(5,200m)建設。26日、C1からC2に向かって移動中の大宮が午前7時半頃、5,600～5,700mで滑落し5,300m付近で止まった。15分後には死亡が確認された。このため登山は中止された。]

[31] 1998年夏

ガイアアルパインクラブ(2)

北村俊之(35)／棚橋靖(35)

[西面8月5日北村、10日棚橋登頂成功。]

[32] 1999年夏

日本勤労者山岳連盟(7)

隊長：近藤和美(57)／隊員：倉橋秀都(39)、池田壮彦(52)、清野嘉樹(37)、石野俊子(36)、森真平(30)、本間兼一(28)

[西面からの登頂を目指して7月1日4,300m地点にBC設営。2日C1(4,900m)、5日C2(6,100m)、9日C3(6,800m)、18日C4(7,300m)建設し、29日、倉橋、森、清野が登頂に成功。28日に登頂した池田が頂上付近でヘルマン・プールのピッケルを拾得した。29にも近藤が登頂した。]

[33] 1999年夏

福岡登高会(10)

20世紀 日本人ナンガ・パルバット登頂者リスト

	氏名	生年月日	登頂年月日	年令
1	中西 紀夫	1958.03.	1983.07.31	25○
2	谷口 守	1948.12.	1983.07.31	34○
3	花田 博志	1960.03.	1985.07.08	25
4	菊池 守	1955.05.	1985.07.08	30
5	岡林 良一	1951.11.	1987.08.19	35
6	松井 公治	1950.09.	1987.08.19	36
7	遠藤 晴行	1957.02.	1988.07.12	31
8	遠藤 由加	1966.01.	1988.07.12	22
9	×佐藤 正倫	1963.08.	1990.07.24	26
10	戸高 雅史	1961.12.	1990.08.18	29
11	望月 泰彦	1960.02.	1993.08.16	33
12	坂井 広志	1957.02.	1995.07.23	38
13	矢部 幸男	1965.09.	1995.07.23	29
14	秋山 武士	1968.10.	1995.07.23	31
15	澤田 実	1968.07.	1997.07.07	28
16	大谷 篤	1972.05.	1997.07.18	25
17	山本 秀夫	1949.12.	1997.07.18	47
18	賀集 信	1949.01.	1997.07.18	48
19	平岡 竜石	1968.07.	1997.07.19	27
20	小野 岳	1960.07.	1997.07.19	36
21	×榊原 義夫	1953.11.	1997.07.19	43
22	北村 俊之	1962.08.	1998.08.05	35
23	棚橋 靖	1963.01.	1988.08.10	35
24	倉橋 秀都	1960.02.	1999.07.27	39
25	森 真平	1969.02.	1999.07.27	30
26	清野 嘉樹	1962.04.	1999.07.27	27
27	池田 壮彦	1946.10.	1999.07.28	52
28	近藤 和美	1941.11.	1999.07.29	57
29	竹内 洋岳	1971.01.	2001.06.30	30

隊長：大石義豊(58)／隊員：池辺勝利(55)、副島勝人(54)、山内耕二(50)、西田哲朗(45)、平田恒雄(64)、友清昇太(40)、横内信洋(28)、広田篤彦(39)、藤野忠臣(56)

[南西稜からの登頂を目指して6月21日BC設営(3,500m)。27日C1(5,100m)、7月6日、仮C2建設するも、7月16日到達した6,000m地点にはキャンプ地が見つからず登山を断念。]

[34] 2001年夏

アマカル・アルパインクラブ(1)

竹内洋岳(30)

[外国隊に参加し、通常ルートから6月30日登頂に成功した。]

[35] 2002年夏

江北山の会(1)

隊長：細田一郎(51)

[南西稜からの登頂を目指して入山したが、8月17日、パキスタン人が落石で怪我をしたため登頂を断念した。]

[36] 2003年夏

江北山の会(1)

隊長：細田一郎(52)

[西面からの登頂を目指してパキスタン人と入山。7月25日BC設営。31日パキスタン人滑落負傷し、以後は単独。8月6日にC2に到達したのが最高点となった。]

[写真：岩と雪99号 藤塚弘撮影]



◎南壁の遭難者

1983年

6月17日 志村 一夫(32) 南西稜 登歩渓流会

7月12日 山田 信義(44) 南西稜 福岡山の会

” 飯田 敏(46) 南西稜 福岡山の会

” 高森雄一郎(30) 南西稜 福岡山の会

1984年

7月上旬 角田 不二(31) 中央側稜 H A J

” 今給黎宣幸(28) 中央側稜 H A J

7月上旬 肥田 繁男(26) 中央側稜 H A J

” 小暮 孝(26) 中央側稜 H A J

1990年

8月18日 中島 修(28) 南西稜 川崎教員

◎西壁の遭難者

1984年

12月8日 瓶田 裕己(29) 北西稜 山学同志会

1997年

7月6日 大宮 秀樹(26) 西壁 太陽と風の会

志村一夫 (SHIMURA Kazuo)

1951.1.1～1983.6.17 東京都板橋区生れ。姉の語るには前年大晦日昼間に出産したが父が元旦で届けた。都立練馬工業高校に進学、単独で奥秩父、丹沢、八ヶ岳等を登る。1970年、登歩渓流会に入会。四季を通して谷川岳、穂高岳、八ヶ岳、越後の岩場を登る。76年(秋)会が翌年登山予定のヌプツェ(7,879m)を偵察するため初めてネパール入り。北西稜の偵察を目的にシェルパと約6,000mまで達する。終了後ロールワリン、ランタン、ダウラギリ等のトレッキング。77年(春)登歩渓流会がヌプツェに派遣した登山隊(加藤春雄隊長(38)ら8名)に参加。志村は北西稜上のC 5 (7,350m)まで到達。隊は5月11日、国井治とザンブーが北西峰(7,745m)の登頂に成功したが主峰は断念した。79年(夏)ヨーロッパ・アルプスを登攀、グレボン東壁等を登る。終了後、粕川要治とネパール、クスム・カングル(6,369m)をアルパイン・スタイルで登攀予定であったが、C 1までで断念した。83年(春)登歩渓流会がナンガ・バルバット(8,126m)の南西稜からの登頂を目指して派遣した登山隊(国井治隊長(38)ら10名)に登攀リーダーとして参加。6月17日、6,600mのC 3からC 4 (7,400m)へ向かった6名が雪崩に襲われ、固定ロープに入る手前であった志村が行方不明となった。遺稿・追悼集に「ナンガ・バルバットに逝く」(1984年)がある。

馬場哲也 (BABA Testuya)

1960.3.24～1989.7.18 愛知県名古屋市生れ。県立尾北高校時代はブラスバンド部で活躍。1978年東京農業大学に入学し山岳部に所属し登山を始める。四季を通して南・北アルプスに通い登山経験を積む。81、83年韓国で岩登りを行う。85年(夏)日本山岳会が創立80周年を記念して中国、キレン山(5,547m)に派遣した登山隊(磯野剛太隊長(31)ら13名)に参加、8月8日、隊長、目黒義和(20)と共に初登頂に成功した。86年(夏)東京農業大学が中国、崑崙山脈の最高峰(7,167m)の初登頂を目指して派遣した登山隊(早坂敬二郎隊長(39)ら11名)に参加。登山隊はウルムチ、カシュガル、イエチェン

を経て南面5,270mにBC設営。8月16日、小林新二(32)、中嶋真也(26)、馬場、佐藤正倫(22)、沼野幸正(21)が初登頂に成功した。88年(春)日本山岳会が中国、ネパールと合同でエヴェレストの交差縦走に挑戦した登山隊の北側(橋本清隊長(50)ら64名)に参加。北稜のC 5 (7,790m)のルート仕事を担当し、第二次登頂隊に選ばれたが登山中止となった。その秋に山田昇がシシャバンマとチョー・オユウの連続登山を計画しそのメンバーとして隊への参加を誘われたが、翌年に農大のナンガ・バルバット計画があり断念した。89年(夏)農大がナンガ・バルバットに派遣した登山隊(早坂敬二郎隊長(42)ら15名)に参加。登山隊はラキオト・ピーク南東稜から挑戦したが、7月16日C 3 (5,600m)への荷上げ中の馬場が落雷に遭い、荷物のガス・カートリッジに引火、搬出中の18日5,250mで死亡した。登山報告書「NANGA PARBAT 1989」(1991年)に追悼がある。

中嶋真也 (NAKAJIMA Shinya)

1960.2.21～1990.12.30 三重県松坂市生れ。県立相可高校時代はテニス部で活躍。1978年東京農業大学に入学し山岳部に所属し登山を始める。四季を通して南・北アルプスに通い登山経験を積む。81、83年韓国で岩登りを行う。81年(夏)東京農業大学が崑崙山脈の最高峰(7,167m)の初登頂を目指して派遣した登山隊(早坂敬二郎隊長(39)ら11名)に参加。登山隊はウルムチ、カシュガル、イエチェンを経由して南面5,270mにBCを設営。8月16日、小林新二(30)、中嶋、馬場哲也(26)、佐藤正倫(22)、沼野幸正(20)が初登頂に成功した。89年(夏)農大がナンガ・バルバット(8,126m)に派遣した登山隊(早坂敬二郎隊長(42)ら15名)に参加。登山隊はラキオト・ピーク南東稜から挑戦したが、7月16日馬場が落雷のため負傷しこの救出活動を行う。処理後ラキオト・ピークに目標を絞って活動を再開したが、再び滑落事故が発生し登山は中止された。中央大学山岳部OBの近藤浩行(29)と白馬岳主稜を目指し入山したが、89年12月31日(推定)大雪溪からの雪崩のため村営白馬尻小屋跡で埋没死亡した。

遺体は翌年5月収容された。登山報告書「NANGA PARBAT 1989」(1991年)に追悼がある。

横田川福造(YOKOTAGAWA Fukuzo)

1949.12.30～1997.6.13 静岡県島田市生れ。国土館大学に入学し在学中から登山を開始する。1977年、静岡ケルン山岳会に入会。南・北アルプス、富士山等を中心に登山経験を積む。83年(夏)静岡市岳連がインド、ヒマチャル・プラデシュに派遣した登山隊(西畑武隊長(40)ら8名)に参加。目標は南ダッカ氷河の無名峰(5,810m)で、8月13日、隊長、横田川、原田和彦(28)とHAPが初登頂に成

功した。86年(夏)静岡市岳連がインド、ヒマチャル・プラデシュのパプスラ(6,451m)に派遣した登山隊(松永義夫(38)ら5名)に参加。8月24日、隊長、横田川、榛地良行(28)が東面新ルートから登頂に成功した。97年(夏)静岡市岳連がブロード・ピーク(8,051m)に派遣した登山隊(松永義夫隊長(49)ら10名+ジェフリーバブ)に参加。通常ルートから登山中、6月16日午後1時過ぎC3(6,900m)予定地付近から発生した雪崩に3名が巻き込まれ、横田川とバブが行方不明となり18日、5,300m付近で遺体で発見された。登山報告書「鎮魂の嶺 BROAD PEAK」(1998年)に追悼がある。

ヒマラヤ400号記念原稿募集!!

HAJ機関誌「ヒマラヤ」は、来年(2005年)3月号で「400号」となります。編集部ではそれを記念して会員の皆様から下記のとおり原稿を募集しますので積極的な投稿をお願い致します。

記

1. 内容：ご自身の「ヒマラヤ地域での体験記」(研究・論文は除きます。HAJの「ヒマラヤ地域」とは、ネパール、インド、

パキスタン、アフガニスタン、ブータン、中国、カザフスタン、キルギス、タジキスタンの9か国です。)

2. 分量：2,800字以内、写真2枚(プリント)(裏に日時、場所などの説明を記入)
3. 締切り：2005年3月末日
4. その他：タイトルを必ずつけて下さい。到着順に随時掲載致します。原稿料はありません。

■ 寸 感 ■

このところ「ヒマラヤ」の編集や対外文書作成、データ保存などを出口当会員の提供してくれたワープロ(東芝ルポ)でこなして来たが、遂にそのプリンターが寿命を終えてしまった。事務局には以前からパソコンが導入されているが、なんとかお世話にならないで済ませようとしたのだが、野沢井の遭難で少し延びてしまいとうとう困ってしまった。それにしても便利なものなのに未熟者にとっては不便も多い。(山森)

事務局日誌(9月)

- 1日(水) ワープロ(ルポ)プリンター不調となりパソコン操作を始める
- 4日(土) 都岳連個人会員10周年記念集会(於：モンベル、山森)

- 5日(日) 前専務理事・野沢井歩一周忌(於：水戸、山森、中川、睦好、古関、田辺、林、中岡)
- 8日(水) カンペンチン募集要項作成
- 9日(木) ヒマラヤ395号発送
- 10日(金) サマー・キャンプ募集要項発送
- 27日(月) 東京集会(16名)

ヒマラヤ No.396 (11月号)

平成16年10月10日印刷 16年11月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャロバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本社 / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

岩波書店アネックス5F
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396

■大阪営業所 / 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル ☎0120-811395
(通話料無料)をご利用下さい。

東京新聞の山岳書

東京新聞出版局
中日新聞東京本社

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル6F
[TEL] 03-3595-4830(代) [FAX] 03-3595-4831
<http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/>

※定価額に消費税も含まれています。

<p>最新クライミング技術 菊地 敏之 著</p>	<p>ベーシック・フリークライミング 菊地 敏之 著</p>	<p>山小屋の主人の炉端話 工藤 隆雄 著</p>	<p>チャレンジ！アルパインクライミング 【北アルプス編】 廣川 健太郎 著</p>	<p>チャレンジ！アルパインクライミング 【南アルプス・八ヶ岳・谷川岳編】 廣川 健太郎 著</p>	<p>すぐ役立つ山のメモ帖 岳人編集部 編</p>	<p>中高年の雪山入門 福島 正明 著</p>	<p>すぐ役立つ新・山の雑学ノート・第1集 岳人編集部 編</p>	<p>女性ガイドのしなやか登山術 樋口 英子 著</p>	<p>登山の運動生理学百科 山本 正嘉 著</p>	<p>山書散策 河村 正之 著</p>
<p>フリークライミングからマルチピッチ、アルパイン、ビッグワイルドまですべてのロッククライマーへの、実践的な最新技術書。ひとつの技術を、単なるマニュアルとしてではなく、その意味や選択基準までを含め解説。</p>	<p>新しい生涯スポーツとしてあらゆる世代に爆発的な人気のフリークライミングを、ムーンウォークの作り方、ロープワーク、自然壁の登り方、スカルアップのしかたや取り組み方を必要不可欠な多項目にわたって、ビジュアルにわかりやすく、かつ理論的に解説。ジムからはじめてアウトドアを目指す、すべてのクライマーのための教則本の決定版。</p>	<p>著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る人話の取っ掛きのお話。</p>	<p>北アルプス全域を代表するルートを紹介、分かりやすくカラー写真で解説したルート案内書。夏の岩壁、雪壁のバリエーションルートに加え、これまでほとんど紹介されていない冬期岩壁登攀、ルンゼ登攀を紹介。</p>	<p>上巻の北アルプス編に続いて、南アルプス・八ヶ岳・谷川岳などから、日本を代表するアルパインクライミングルート20本を「山岳実用書」に使用し、わかりやすく解説したルートガイドの決定版。</p>	<p>登山の実践から環境問題、山の文化誌にいたるまでさまざまな話題を扱った。</p>	<p>低山から夢のヒマラヤまで。トランフルを未然に防ぎ、白銀の大自然を堪能しながら、雪山歩きを楽しもう。</p>	<p>山での話題が登山と山の数だけではない。山はもつと素敵になると呼ばれる、女性登山ガイドのユニークな登山講座。</p>	<p>常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもつと素敵になると呼ばれる、女性登山ガイドのユニークな登山講座。</p>	<p>「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマラヤなど高所登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。</p>	<p>今まで数多く発行された山書。何を読んだらよいか、そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。</p>
1,680円	1,785円	1,575円	2,625円	2,625円	1,470円	1,680円	1,470円	1,575円	2,100円	1,575円

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

ICI本店	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3208-6601	新潟とやの店	〒950-0982	新潟県新潟市堀之内南1-16-52	025-241-5134
新宿西口店	〒160-0023	東京都新宿区西新宿1-16-7	03-3346-0301	仙台店	〒983-0852	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8	022-297-2442
神田登山店	〒101-0051	東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F)	03-3295-0622	秋田広小路店	〒010-0001	秋田県秋田市中通1-4-5	018-884-1771
神田本館	〒101-0051	東京都千代田区神田小川町3-10	03-3295-3215	盛岡大通店	〒020-0022	岩手県盛岡市大通1-10-16	019-626-2122
八王子店	〒192-0081	東京都八王子市横山町3-12	0426-46-5211	札幌店	〒060-0062	北海道札幌市中央区南二条西4-8	011-222-3535
大宮店	〒330-0802	埼玉県さいたま市大宮区宮町1-37	048-641-5707	北十二条店	〒001-0012	北海道札幌市北区北十二条西3-5	011-747-3062
高崎店	〒370-0831	群馬県高崎市新町5-3	027-327-2397	伏古店	〒007-0861	北海道札幌市東区伏古一条4-1-45	011-787-0233
川越店	〒350-0045	埼玉県川越市南通町14-4	0492-26-6751	大阪ミナミ店	〒556-0005	大阪府大阪市浪速区日本橋4-9-17	06-6636-2470
甲府店	〒400-0814	山梨県甲府市上阿原町481-1	055-221-0141	神戸三宮店	〒650-0021	兵庫県神戸市中央区三宮町1-3-10	078-335-0355
宇都宮今泉店	〒321-0962	栃木県宇都宮市今泉町1560	028-639-9650	外商部(メールオーダー係)	〒169-0073	東京都新宿区百人町2-1-2	03-3200-7219
太田高林店	〒373-0825	群馬県太田市高林東町1386	0276-38-0620				
松本店	〒390-0874	長野県松本市大手3-4-24	0263-36-3039				
長野店	〒380-0825	長野県長野市末広町1356	026-229-7739				
茅野駅前店	〒391-0001	長野県茅野市茅野3502-1	0266-82-8510				
新潟店	〒950-0087	新潟県新潟市東大通2-5-1	025-243-6330				



ICI 石井スポーツ